９　弥生時代の工房

武末　純一

（１）はじめに

ここでは弥生時代の九州の石器および青銅器工房を中心に、展開様相を時期ごとに見ていく。石器の生産体制が、青銅器の生産体制にも受け継がれたとみられるからである。

（２）石器工房

福岡県糸島市曲り田遺跡では弥生時代早期の石庖丁未成品は 15 点中 7 点で、一つの住居に集中せず、石庖丁の穿孔具とともに調査区域に散在する。しかも、穿孔具と未成品が共伴する竪穴住居は無いから、ここの早期の石庖丁は集落全体でつくる自給自足的生産で、専業的生産区域は無い。この時期の未成品率はどこも 50％前後で(1)、前期初頭には 20％前後になる。

次の定点は北九州市香月集落(2)で、中期前半の石器製作住居 (辻田西 H － 25) が遠賀川下流右岸の拠点集落内にあらわれる。この住居では石器製作用の敲打器や砥石とともに、扁平片刃石斧の未成品 2 点、石庖丁未成品 3 点、磨製石鏃未成品 19 点、石戈未成品 5 点、石剣未成品 5 点が使用欠損の太型蛤刃石斧 2 点とともに出て、石器をつくる際の大量の石屑が炉の東側に散乱する。石器は打裂段階から仕上げの研磨・穿孔まで各段階がみられ、拠点集落の中での石器製作工人集団の設定を示す。

重要なのは、同時に香月集落と隣接する別の丘陵に、門田遺跡が出現する点である。ここは中期初頭～前半代の円形竪穴住居 3 棟には作業台石が据えられて、大小の砥石や多量の石屑、石器製作用具とともに石庖丁・磨製石鏃・磨製石剣・石戈など、凝灰質粘板岩などの石材でつくった石器が出た。これらはほとんどが未成品で、石庖丁は 22 点中の 3 点だけに使用痕がある。北側の丘陵にあり、日当りは悪いが、南側の数百 m には石器石材の露頭があり、容易に採集できる。4 号住居は火災で石器製作の状況をそのまま残すが、土器は破片数点だけで、農村の様相とは異なる。住居はいずれも径 4 m 台と小型で、農村にみられる袋状の貯蔵穴もなく、石器製作を引き受けた母集団 (香月集落) が生み出した石器専業製作集団である。こうした製作集団を設定するシステムが金属器の生産体制にも受けつがれたのである。なお、福岡県飯塚市立岩遺跡では、方 600m の丘陵内にこうした製作集団が 13 も密集した。

（３）青銅器工房

青銅器工房の姿は中期前半に明確になる。吉野ヶ里遺跡では南端近くの平面長 6 m× 幅 1.2m の中期初頭～前半の溝状土坑 (田手二本黒木地区第 154 調査区 SK04) から鋳造溶解滓 (？) や鋳型片、青

銅片、高純度の錫片、青銅環頭付鉄刀子やノミ状鉄製工具、炉跡の一部とみられる粘土、多量の焼土・灰・炭化木などが出て、付近からは擬無文土器片や銅矛の中子片も出た。これらは廃棄された状態で、鋳造遺構そのものではないが、拠点集落の一角に設定された青銅器工房の姿を暗示する。他の地区には関連遺物は出ず、小規模な生産である。

熊本市八ノ坪遺跡は当時の熊本平野の海岸に面した遺跡で、青銅器工房は前期前半に最初に出現したA地区ではなく、中期初頭に現れた小さくてB地区に見られる。ここは中期初頭から前半に擬無文土器が集中して、小銅鐸や細形の銅矛・銅戈・銅剣などの鋳型5点と送風管や銅滓、銅バリ（湯口部）、銅滓が付着した土器や高温を受けた土器片も出た。鋳造関連遺構[3]は、KD1－3～5グリッドに集中する。鋳型や送風管などもその周辺で出て、ここが中期初頭～前半の青銅器鋳造工房域であった。

このように中期前半までの青銅器工房は小規模で、無文土器人集団が定着しても青銅器生産はすぐには始まらない。朝鮮半島の故地との交流回路の設定の中で、朝鮮半島でも極めて限定された場所に居住した青銅器工人集団[4]を、拠点集落にはじめて導入できたといえる。

弥生時代の後半期(中期後半～後期)になると拠点集落の中での青銅器製作工人集団の場、つまり青銅器工房の全体像がより明確になるとともに大規模になる。

佐賀県鳥栖市安永田遺跡では中期末に、おそらく環溝となる2号溝の内側の一角に、青銅合金の溶解炉跡があり、それをとり囲む住居跡や祭祀土壙からは、福田型銅鐸や中広形銅矛の鋳型片、送風管が出土した。つまり、この住居群には青銅器を鋳造した人々が居住し、その内側の広場には炉が設けられて、青銅器を鋳造する際には特殊な土器(瓢形土器など)祭祀が行なわれた。ただし、この工房域の広さは1,500㎡ほどで、区画する施設もなく、調査面積全体に対する鋳型の数は500㎡に1点で、大々的な生産とまでは言えない。

こうしたあり方と比較した時、鋳型が100㎡に1点出る須玖遺跡の青銅器工房がいかに桁外れであるか認識される。永田A地区では工房を区画する平面長方形の周溝も明らかで、この周溝は最低でも2,000㎡を超え、安永田よりも大きい。しかも、坂本、黒田、あるいは未知の工房も予想されるから、石器工房が一つの集落に密集した立岩遺跡のあり方を彷彿とさせる。

（4）朝鮮半島の青銅器製作関連資料

朝鮮半島の青銅器工房はまだ全く不明である。先端を曲げた送風管はあり[5]、やはり坩堝／取瓶に上方から送風したとみられる。また、草本類を心にして縄で束ねて粘土を巻く鉄器製作用の送風管は、慶尚南道泗川市勒島遺跡で出た(李2006)。難波洋三は、近畿地域では粘土を巻き付けた棒を引き抜いてから曲げる点に、九州地域の草本類を束ねて曲げてから粘土を巻き付ける送風管との差異をみており(難波2009)、九州の送風管が朝鮮半島に近いといえよう。日本の青銅器の材料は、調合済みのインゴッドのほかに、吉野ケ里の錫塊や久里大牟田遺跡の鉛矛などから見て、各原料の調合が考えら

れている。筆者はその他に、韓国慶山市林堂洞 208―2 番地遺跡の 3 世紀の住居跡から出た 1 世紀頃の銅剣付属具 (禹ほか 2008) や、奈良県脇本遺跡の庄内式期の住居から出た 1 世紀頃の青銅鞘金具破片などからみて、青銅器スクラップ原料もあったと考えている。

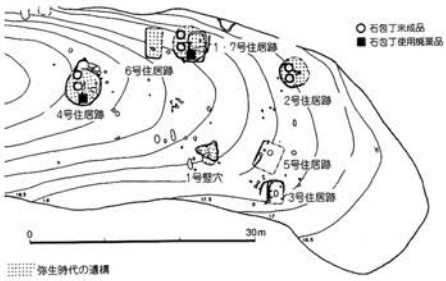
註 1　未成品率が 50％前後にもなるのは、石庖丁の導入期で、製作技術の習熟度が低かったためであろう。
2　香月、馬場山、辻田、辻田西、原の各地区からなる。
3　周溝をもつ中期前半の掘立柱建物 (SX119) や、炭が互層状に堆積し上方から銅バリ (湯口部) が出た中期初頭～前半の土坑 (SK086)、銅滓が出た中期初頭の土坑 (SK091)、小銅鐸鋳型が出た SK171(中期前半) がある。
4　韓国では今、大規模開発に伴う調査が盛んだが、これだけ掘っても青銅器工房は未発見である。
5　韓国の京畿道加平項沙里遺跡出土資料を実見したことがある。

(引用参考文献)

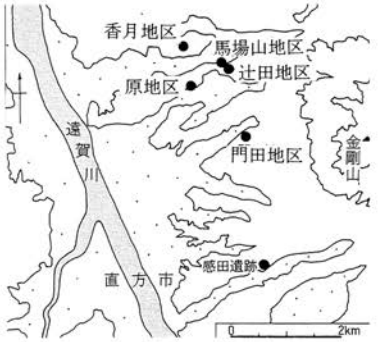
禹炳喆ほか 2008「慶山林堂洞 208―2 番地遺跡」『嶺南文化財研究』21
春日市教育委員会 1987『須玖永田遺跡』(春日市文化財調査報告書第 18 集)
春日市教育委員会 2005『須玖永田Ａ遺跡２－４次調査－』(春日市文化財調査報告書第 40 集)
春日市教育委員会 2005『須玖永田Ａ遺跡３－２次調査－』(春日市文化財調査報告書第 43 集)
北九州市教育委員会・北九州市教育文化事業団 1979『門田遺跡』(北九州市文化財調査報告書第 33 集)
北九州市教育文化事業団・北九州市教育委員会 1980『北九州直方道路および都市計画道路建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
熊本市教育委員会 2005『八ノ坪遺跡』Ⅰ
熊本市教育委員会 2008『八ノ坪遺跡』Ⅳ
慶南考古学研究所 2003『勒島貝塚Ⅱ　Ａ地区住居群―図版―』
佐賀県教育委員会 1992『吉野ヶ里　神埼工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』(佐賀県文化財調報告書第 113 集)
佐賀県教育委員会 1997『吉野ヶ里遺跡　平成２年度～７年度の発掘調査の概要』(佐賀県文化財調査報告書第 132 集)
下條信行 1989「村と工房」『古代史復元４　弥生農村の誕生』(講談社)
武末純一 2008「弥生時代生産遺跡」『第４回日韓集落研究会共同研究会　日韓集落の研究―生産遺跡と集落遺跡―』
鳥栖市教育委員会 1985 『安永田遺跡－佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査報告書－』(鳥栖市文化財調査報告書第 25 集)
奈良県立橿原考古学研究所 2011『脇本遺跡Ⅰ』(奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 109 冊)
難波洋三 2009「銅鐸の鋳造」『銅鐸―弥生時代の青銅器生産―』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館特別展図録第 72 冊
福岡県教育委員会 1983『石崎曲り田遺跡　－Ⅰ－』(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第８集)
福岡県教育委員会 1984『石崎曲り田遺跡　－Ⅱ－』(今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第９集)
李南珪 2006「 勒島遺跡製鉄関連資料の考察 」『勒島貝塚Ⅴ　考察編』慶南考古学研究所
高麗文化財研究院 2011『加平項沙里遺蹟』

(図版出典) 第 59 図：福岡県 1983・1984、第 60 図：北九州市 1979、第 61 図：下条 1989、第 62 図：熊本市 2005・2008、第 63 図：鳥栖市 1985、第 64 図：奈良県 2011、第 65 図：禹炳喆ほか 2008、第 66 図：慶南考古学研究所 2003 (いずれも改変して作成)

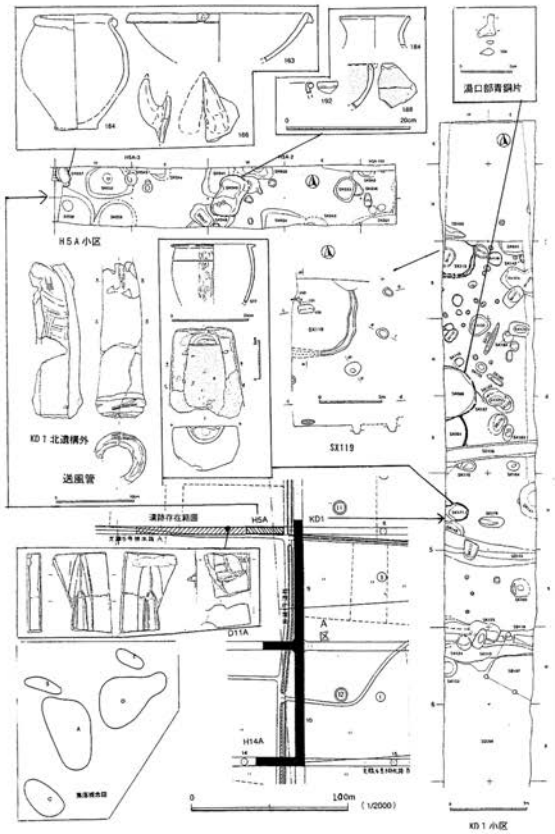
第59図　曲り田遺跡の石包丁製作関係資料



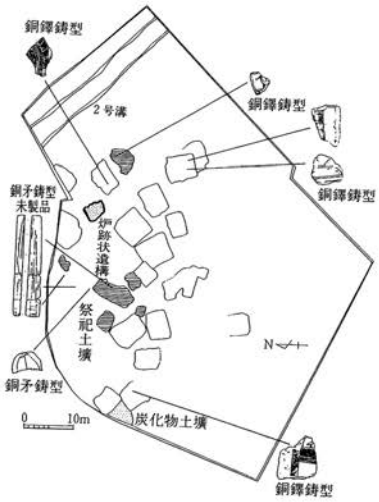
第60図　門田地区の全体図



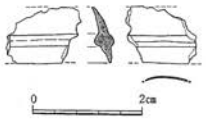
第61図　門田地区の位置



第62図　八ノ坪遺跡B地区の遺構と遺物



第63図　安永田遺跡全体図（弥生中期末）



第64図　脇本遺跡の鞘金具片

第65図　林堂洞６号住居の青銅器

第66図　勅島遺跡の送風管